

幻の交響曲に賭けた作曲家の悲劇

平居高志著

中国で最初の交響曲作曲家

洗星海とその時代



A5判 358頁
アルファベータブックス
[本体 3,500円 + 税]

榎本 泰子

近代以降の中国で、西洋の音楽理論に基づいて作られた管弦楽曲のうち、最もよく知られているのはピアノ協奏曲「黄河」だろう。文革時代に盛んに演奏され江青に愛されたこの曲は、抗日戦争期に作られた「黄河大合唱」を改編したものだ。「黄河大合唱」の作曲者が、洗星海（しょう・せいかい、一九〇五―一九四五）である。

洗星海は中国国歌「義勇軍行進曲」の作曲者である聶耳（ニエ・アル、一九一二―一九三五）と並ぶ「人民音楽家」として、中国音楽史上特別な存在である。一九三九年に延安で作られた「黄河大合唱」は八つの章から成る組曲で、黄河と中国の悠久の歴史を歌いながら、目前の民族の危機に強い警告を發し、抑圧された人民に立ち上がれと呼びかける。初演時には毛沢東にも高く評価された。

本書の著者平居高志氏は、合唱を趣味としていた一九八〇年代末に初めてこの曲を聴いた時の衝撃が忘れられず、高校で教えながら三〇年かけて洗星海について調べ、日本国内初となる評伝をまとめあげた。ページの端々からにじみ出る音楽への愛と、研究対象への執着とでもいえるべき感情が、本書の叙述の大きな推進力となっている。それは読む者に、「研究」という仕事のあり方についても考えさせてくれる。

左翼音楽家と見なされる洗星海は、本書タイトルにもあるように「中国で最初の交響曲作曲家」でもあった。彼が極貧の中で中国のベートーヴェンになりたいと思っていたこと、中国国内の最高峰である上海・国立音楽院になじめず、フランスに渡って苦学しながらパリのコンセルヴァトワール（国立音楽院）で学んだことなどは、音楽史の本でよく語られる。

何より、世界的に有名な作曲家ポール・デユカ（交響詩「魔法使いの弟子」で知られる）に師事したことは、当時の中国人音楽家としては最高の荣誉であり、聶耳が果たせなかった欧州留学の夢を果たす形となった。聶耳が二三歳の若さで亡くなったその年に、洗星海は入れ替わるようにフランスから帰国し、救亡音楽運動の指導者として頭角を現していく。本書は洗星海の誕生から、パリ留学時代、帰国後の上海での活動、武漢から延安へ至る時代、「黄河大合唱」の創作前後、ソ連行きからわずか四〇歳の死までを、それぞれ一章ずつ割いて丹念に検討している。

聶耳は国民党の追及から逃れた先の日本で亡くなったことから、日本人の間でも比較的関心が高く、齊藤孝治『聶耳閃光の生涯』（聶耳刊行会、一九九九年）や、岡崎雄兒『歌で革命に挑んだ男 中国国歌作曲者・聶耳と日本』（新評論、二〇一五年）などの専著がある。また最近では、聶耳の生きた時代を重層的に描き出した久保亨『日本で生まれた中国国歌「義勇軍行進曲」の時代』（岩波書店、二〇一九年）という優れた論考がある。評者自身、著書で何回か聶耳を取り上げたことがあるが、その理由は彼が左翼音楽家の筆頭とされながら、明月歌舞団の上演活動や映画音楽の制作など、モダン上海の音楽文化の最先端に位置していたからである。その

聶耳と比較すると、洗星海にはある種のわかりにくさというか、位置付けが難しいところがある。それが一体何に由来するのかということだが、本書を読んで初めて理解できた。

本書は中国国内の先行研究を踏まえつつ、検証が不足している点や、明確に言及されていない点に対して、著者なりの答を出していこうとする。数多くの論点を大別すると、洗星海の経歴に関する点と、洗星海の音楽史上の位置付けに関する点の二つに分かれる。

まず経歴に関して。著者は洗星海自身が書いたいくつかの履歴と、同時代の音楽家らの証言、そして在籍した学校の記録などを照らし合わせていく。その過程自体にスリルがあるので、ここでは詳しく紹介しないが、例えばパリ留学についてである。著者の調査によれば、約五年に及ぶ滞在中で、国立音楽院に在籍したのは最後の四か月に過ぎず、それもデユカの急逝により断ち切られたという。デユカや学生らと撮った一枚の写真が知られているが、洗星海が在籍したと称する「高等作曲科」（中国語原文は「高級作曲班」というクラスは存在しない。デユカやラヴェル、プロコフィエフら錚々たる作曲家に評価されたという三重奏曲「風」に至っては、楽譜も録音も残っていない。洗星海の経歴を検証した結果、著者はいくつもの誇張や潤色に気付き、そこに洗星海の「権威主

義と誇張傾向」（本書九三頁）を見て取る。

ただし、洗星海が国立音楽院に入学する前、スコラ・カントルムという私立の音楽学校で作曲を学んだことや、パリ滞在中のプロコフィエフと何らかの接点があったこと（この発見の「感動と興奮」については九七頁）、「ヴァイオリンソナタ・二短調」によってデユカに評価され、特別に国立音楽院への入学を許されたと推定できることは、著者独自の資料調査により裏付けられている。つまりパリ留学そのものやデユカに見出されたことは嘘ではないが、中国国内で今も喧伝されている「パリ国立音楽院を優秀な成績で卒業」というような経歴は、洗星海本人が自ら作ったストーリーであることがわかる。

そのほか、晩年のモスクワ行きについても、その目的に不審な点があるという。著者は洗星海と王明、康生というソ連留学組との関係に着目し、「星海は、彼らによって何らかの密命を託されていた」（二七五頁）と推測する。モスクワで病に苦しむ洗星海のかたわらにユダヤ人女性がいたこと（洗星海は中国に妻子を残していた）、洗星海の窮状を当時中国共産党から追放されていた李立三とその妻（ロシア人）が救ったことなど、共産党史観からは漏れてきた部分も本書は克明に綴っている。

次に音楽史上の位置付けについて。洗星海のわかりにくさは、とりわけ晩年の活動や彼の最期をどう評価するか、という部分にあるようだ。洗星海は一九四〇年後半にモスクワに到着したものの、翌年六月に独ソ戦が始まったことで疎開生活を余儀なくされ、モンゴルのウランバートルやカザフスタン国内を転々としたあと、再びモスクワに帰ってそこで病没した。この悲劇的な死が、日本で客死した聶耳と同様に、かえって（＝音楽家としての実際の業績以上に）洗星海の名を高めたと評者は考えているが、著者によれば、洗星海の悲劇はこれだけではなかったのである。

洗星海はモスクワで念願だった第一交響曲「民族解放」を完成させたものの、音として聴く機会がまま没した。それが音楽家にとつての不幸であることは想像がつくが、さらに彼が死の床にあつてさえ、「ヨーロッパの大都市のオーケストラコンサートで、自分の作品を聴く」ことを夢見ていた（洗星海の書簡より、二九二―二九三頁）ことは衝撃的である。「黄河大合唱」によって中国人の民族意識を奮い立たせ、死後には「人民の音楽家」として毛沢東から称えられた作曲家が、「ただ救亡歌曲を書いているだけでは、私の能力と技術は十分に発揮されない」と考えていたのである（二八九頁）。この事実をどのように解釈すればよいのだろうか。

戦間期の上海（＝東洋のパリ）と本場のパリで、冼星海は

貧しいながらも国際色豊かな文化的生活を通算一〇年も送った。帰国当初は上海の工部局交響楽団の指揮台に立つという夢を持っていたが、それが（おそらく彼の實力不足によって）破れた時、なぜ延安行きを選択したのだろうか。あこがれの重厚な交響曲を捨て、平明・短小をよしとする救亡歌曲の創作に没頭した時期、彼が抱えていたはずの苦悩は、先に述べたような誇張や潤色に邪魔されて読み取ることが難しい。しかも冼星海がモスクワへ発った後の延安では、芸術的な「向上」より労働者・農民・兵士への「普及」を優先すべきとの毛沢東の方針が確立した（文芸講話）。冼星海の芸術家としての葛藤は、中国を離れたため批判に遭うこともなかったかわりに、「人民の音楽家」の称号の下に覆い隠されたのである。著者は終章で、「冼星海の事例を一般化」し、芸術が政治に従属する時代に芸術家が生きる道として二つを想定する。一つは「表向き活動を公務としてこなした上で、裏で自身の世界を追求する」こと。もう一つは「戦時下の一時的な状況であるとあきらめて耐え、将来に期待する」ことである（三一―四頁）。こうした平易な表現は本書の特徴であり、この問題を抗日戦争期の延安という限られた時間と空間から解き放ち、より普遍的な問題として読者一人ひとりが考える

ことを容易にしてくれる。

著者は、戦争や革命という時代の制約の中で、冼星海のような芸術家たちが「芸術性と大衆性との両立に悩みながら」創作を続けた結果、「その理想的成就の代表格」として「黄河大合唱」が成ったと結論付ける（三一―四頁）。しかし時代が変わればもっと別の芸術のあり方が許されてもよいはずだった。「芸術家の本当の苦しみは、建国後にこそあった」（三二―六頁）という本書末尾の一句は、建国期から文革へと至る時代に芸術家を見舞った多くの悲劇を想起させ、読む者の胸に重くのしかかる。

「黄河大合唱」は民族の精神を表現した作品として、現在も建国を記念する行事などで繰り返し演奏されている。本書によって、版本や演奏年代による違いが大きいと知り、評者もYouTubeで聴き比べてみた。中でも一九五五年版は生前の冼星海によるオーケストレーションを踏まえ、映像にもこだわっているのので一見の価値がある。ちなみに冼星海畢生の大作である第一交響曲「民族解放」は、著者によれば楽譜が残るのみで、現在の中国では録音も動画も見当たらないということだ。あの世の冼星海が知ったら何を思うだろうか。

（えのもと・やすこ） 中央大学